20210627中野教会　「聖書の学びー旧約聖書のテーマ」

　　　　　　　　　　**悩ましき事：聖絶（ヘーレム）の理解**

聖書箇所：サムエル上15:1-35

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　今回は「聖絶」についてです。今まで「主イエスのたとえ話」から理解困難なものを意図的にとりあげてお話をしてきました。しかし、私の専門は一応、旧約聖書学ですので、やはり旧約からのお話もさせてほしいので、これからは新旧約、取り混ぜながら、「聖書の学び」を進めさせてほしい、と思う次第です。旧約からは、適宜テーマを決めて、それに関し、聖書はなにを語り掛けているのか、を見ていきたい、と願っています。牧師の説教ではあまり、採り上げられないことをあえて取り上げたい、と思っています。我々一般信徒が本当は疑問に思っていることを、牧師はあえて避けている、と思われることがままあります。いろいろ調べてみると、それは、確たる解釈ができる自信がない、という理由のことが多いと思います。改革派の神学者の先生の中には、説教と言うのは「神の言葉」の延長であり、説教されることにより、その言葉は「神の言葉」になる、と言うことを言っている人がいます。こんなこと言われるとなおさらのこと、自信のないことは避けたい気持ちになるのではないでしょうか。私から言えば、それは「ズル」ということです。私は、牧師ではないので、かえって自由にものが言える立場にあるので、言いにくいこともずけずけ言えるのかもしれません。でも皆さんが私みたいな人間に期待しているのはそのような率直さでしょうから、今日も、私自身の見方を含めお聞きいただきたい、と思います。しかし、何千年来議論されてきて決着がついていない話ばかりですから、自分の考えが、これぞ真理、などという気は全くありません。自分自身でそれなりに一生懸命考えた結果ではありますので、少なくとも皆さんが考えるための材料ぐらいにはなるであろう、とは思っています。

　今日のテーマの「聖絶」はヘブル語の「he:rem」の訳ですが、新改訳聖書で採用されている訳（やく）です。これは名詞形であり動詞形は「ha:ram」です。辞書によれば、「破壊、滅亡」という意味に加え、「奉献」と言う意味があります。このヘブル語の言葉のギリシャ語訳は「anathema」です。このギリシャ語は新約聖書では「のろい」の意味で使用されています。第一コリント16.22「主を愛さない者はだれでも、のろわれよ。主よ、来てください」とパウロが言った時の「のろわれよ」が「アナテマ」です。「アナテマ、マラナタ」という表現で覚えている方も多いかもしれません。ちなみに、「マラナタ」の方は「主よ、来てください」のことでアラム語です。以上、まとめますと、「he-rem」「anathema」は「破壊、滅亡、奉献、のろい」の意味の言葉である、と覚えておいてください。破壊と滅亡は相互に関連した意味ですが、奉献、のろい、はなぜこのような意味を持つようになったのかは、今や、よくわかりません。このうち、「奉献」のギリシャ語は「anathema」の変化形「anathe:ma」が使用されることもあります。

では、日本語の訳はどうなっているでしょうか。「he:rem」「ha:ram」がまとめて出てくるヨシュア記6.18で見てみます。この節は新改訳第三版では「ただ、あなたがたは、聖絶のものに手を出すな。聖絶のものにしないため、聖絶のものを取って、イスラエルの宿営を聖絶のものにし、これにわざわいをもたらさないためである。」となっています。「聖絶」が4回登場しています。すべてが、「聖絶」という言葉の訳で統一されているのは「新改訳」と「岩波訳」です。新改訳の旧約が最初に登場した1970年より一貫した訳です。岩波訳は岩波書店が聖書の新たな翻訳を試みた時、ヨシュア記を翻訳した鈴木佳秀氏が新改訳の翻訳を踏襲しました。1998年出版です。「聖絶」を訳語としているのはこの2つだけです。文語訳聖書では「詛（のろ）はれし」が4回全部に使われています。口語訳は、3回は「奉納」、1回は「滅ぼす」です。カソリックの代表的翻訳であるフランシスコ会訳は名詞は「奉納物」と「滅び」、動詞は「滅ぼし尽くす」と訳されています。以上から、「he:rem」「ha:ram」の意味には「のろい」「聖絶」「滅び」「奉納物」がある、と言えます。今日のお話の上で、は「he:rem」「ha:ram」を全般的に指すときは「聖絶」の言葉で代表させていただきます。

「聖絶」が問題視されるのはなぜでしょうか。それは、「聖絶」の言葉が、生きている者をすべて「皆殺し」にするよう神が命令している、と理解される個所が多数あるからです。特にヨシュア記に多いです。出エジプトの民がカナンの地に入る時、カナンに既に住んでいた民族を聖絶＝「皆殺し」にせよ、と命じられているようなのです。このような神が主イエスが祈られた「父なる神」と同一とはどう考えても納得できないのです。主なる神はヨシュア記の時代には他民族に対し、残虐非道を求める神であったが新約の時代には、他民族に対しても恵みを示す愛の神に変貌した、と言うことでしょうか。唯一神の基本的信仰に反します。神には「裁きの神」の側面と「愛の神」の側面があって、ヨシュア記の時代には「裁きの神」、新約の時代には「愛の神」の側面が前面に出てきた、と理解するのでしょうか。それはない。両面が不可分のものとして主なる神には存在し、すべての時代において両面が示される、というのが不変の神としては当然です。主なる神はヨシュアの時代には、選びの民が平安に暮らしていけるよう、特別にカナンや周辺の民族を皆殺しにすることを命じた、のでしょうか。実際はそうなりませんでしたから、それをちゃんと実行しなかったイスラエルは大罪を犯したことになります。これが「父なる神」の命令であるなど信じられますか。私は信じられません。なにかがおかしいです。

BC9cのメシャ碑文(モアブ碑文)と言われる遺跡が1869年に発見されました。それによるとモアブの王メシャがイスラエルの都市のすべての人々を殺した、と書かれています。この出来事は旧約聖書の記述と完全には一致しませんが、イスラエルがモアブに敗北する出来事はあったと思われます。その時、モアブ王は住民を「皆殺し」にしたと記されています。これを根拠として、当時は異民族を皆殺しにすることは普通のことで、イスラエルも他民族に同様のことをしたまでだ、というのです。イスラエルが皆殺し的聖絶をしたのはカナンの一部住民に対してのみであり、モアブ王のような皆殺しからみるとまだまし、なのだというイスラエル弁護論もあります。この「聖絶」をどのように理解するべきか、は現在のイスラエル/パレスチナの悲惨な戦争状態をどのように理解するのか、ということにも関連してくる話です。もちろん、全然関係ない、と言うこともできますが、イスラエルにおけるユダヤ教最右翼の一派はイスラエル占領地から非ユダヤ人を完全追放すべきと主張しており、最悪の場合皆殺し的「聖絶」さえ辞さない態度です。他方、ガザ地区の支配勢力、ハマスはイスラム教の「ジハード」を掲げて対イスラエル反抗を呼び掛けており、もし、彼らがイスラエルに勝利するようなことになれば、第二のホロコーストが起きることは確実と考えられます。要するに皆殺し的「聖絶」が両サイドから正当化されているのです。キリスト者はこの事態に対し、何というのか、と言う問題が突き付けられています。旧約聖書における「聖絶」をどのように解釈するのかです。

では、「聖絶」の言葉が出てくるところを具体的に見てみます。まず、ヨシュア記における「聖絶命令」は文字通り実行されたのか、ということです。モーセ律法で出エジプト記22:20「ただ主ひとりのほかに、ほかの神々にいけにえをささげる者は、聖絶しなければならない。」と命じられていますが、ヨシュア記でカナン人等と戦う際、ギブオンの住民たちがイスラエルに従順な態度を示したため、モーセの命令に従って聖絶すべきとしているイスラエルの民よりヨシュアは彼らを守り、「たきぎを割る者、水を汲む者とした」とされています。ヨシュアは味方になりそうな人々をモーセの聖別命令に反し、助けた、というのです。「聖絶命令」と言うのは皆殺し的聖絶の意味ではないか、「聖絶命令」は絶対的ではなくその適用は時の指導者の解釈によって弾力的に解釈されたか、いずれかです。ヨシュア記9:27は彼らを働かせたのは「主の祭壇のため」と言われているところから考えると、ヤハウェ信仰の民となれば、皆殺しは免れ、「聖絶」が完了した、と解釈される余地があった、ように見られます。

このように「聖絶」の不徹底とみられるところは他にもあります。ヨシュア記11章でヨシュアはハツォルの町を攻めます。11:11では「彼（ヨシュア）らは、その中のすべての者を剣の刃で打ち、彼らを聖絶した。息のあるものは、何も残さなかった。彼はハツォルを火で焼いた。」と書いてありますが、11:13では「ただしイスラエルは、丘の上に立っている町々は焼かなかった。ヨシュアが焼いたハツォルだけは例外である。」と記されており、聖絶されたハツォルの方が例外である、と言われています。しかし、14節では「これらの町々のすべての分捕り物と家畜とは、イスラエル人の戦利品として自分たちのものとした。ただし人間はみな、剣の刃で打ち殺し、彼らを一掃して、息のあるものはひとりも残さなかった。 」と書いており、混乱しています。ハツォルは完全聖絶、これ以外の丘の上の町は町を焼くことはせず、家畜等は戦利品として取り、人間は皆殺しとした、と言うのです。ハツォルとそれ以外に町は別扱いしているようでありながら、その直後に皆殺し的聖絶では共通だと言っていることになります。モーセ律法に忠実であった、と言うがための理屈で、ハツォル以外の町は、皆殺し的聖絶はされなかった、と理解する方が自然です。

ヨシュア記16章ではヨシュアがカナンの地を順次、イスラエルの嗣業地として行ったことが語られていますが、16:10「彼らはゲゼルに住むカナン人を追い払わなかったので、カナン人はエフライムの中に住んでいた。今日もそうである。カナン人は苦役に服する奴隷となった。」記されています。カナン人に対する皆殺し的聖絶は行われていないのです。ヨシュアはカナン人を苦役に服する奴隷とした、と言っているのです。ヨシュアたちイスラエルの力と、農耕民族として定着していたカナン人たちの力を考えると、イスラエルがカナン人を奴隷とした、というのも怪しいものです。イスラエルの定着に協力したカナン人たちを後の人たちがイスラエルによる占領との伝承にしていったことも十分考えられます。これらの「聖絶不徹底」の例でみる限り、勇ましい「皆殺し的聖絶」が言われている場合でもそのまま実行された、と考えられる個所は皆無です。

では「聖絶」が実行された、と言われている聖書個所をいくつか見てみます。まずレビ記27:21「その畑がヨベルの年に渡されるとき、それは聖絶された畑として主の聖なるものとなり、祭司の所有地となる。」とあります。ヨベルの年の土地返還は実行された風はないのですが、ここでの「聖絶」は皆殺しとは全く関係なく、聖別し、神の所有物とすることを意味し、内容的には「ha:ram」 の一つの意味「奉献する」に対応しています。民数記31:7-10「彼らは主がモーセに命じられたとおりに、ミデヤン人と戦って、その男子をすべて殺した。

彼らはその殺した者たちのほかに、ミデヤンの王たち、エビ、レケム、ツル、フル、レバの五人のミデヤンの王たちを殺した。彼らはベオルの子バラムを剣で殺した。イスラエル人はミデヤン人の女、子どもをとりこにし、またその獣や、家畜や、その財産をことごとく奪い取り、彼らの住んでいた町々や陣営を全部火で焼いた。」と書かれていますが、節毎の言っていることが矛盾しており「聖絶」はミデヤン人の弱小一部族に関することに過ぎない、と理解すべきです。ミデヤン人はアラビア人のことでイスラエルの民が全体を滅ぼすことなどあり得ません。申命記7:1-2「あなたが、入って行って、所有しようとしている地に、あなたの神、主が、あなたを導き入れられるとき、主は、多くの異邦の民、すなわちヘテ人、ギルガシ人、エモリ人、カナン人、ペリジ人、ヒビ人、およびエブス人の、これらあなたよりも数多く、また強い七つの異邦の民を、あなたの前から追い払われる。あなたの神、主は、彼らをあなたに渡し、あなたがこれを打つとき、あなたは彼らを聖絶しなければならない。彼らと何の契約も結んではならない。容赦してはならない。」としてカナン7民族に対する聖絶命令がありますが、このあとの7:26では「 忌みきらうべきものを、あなたの家に持ち込んで、あなたもそれと同じように聖絶のものとなってはならない。それをあくまで忌むべきものとし、あくまで忌みきらわなければならない。それは聖絶のものだからである。」とあり、「聖絶」が、宗教的意味合いが強いもので皆殺し的なことを意味しているのではない、ということです。むしろ異教の神の霊的力を滅ぼし、戦いによって得たすべての物は神への奉納物とする、というのが「聖絶」の真意ではないか、という推測が成り立ちます。

　ヨシュア記の中での典型的「聖絶」の出来事について考えて見ます。最初は、かの有名なエリコの陥落です。ヨシュアをリーダーとするイスラエルの最初の占領地です。エリコの町を取り巻き、7日目に鬨（とき）の声を挙げると城壁が崩れ落ちた、という話です。6:17-18「 この町と町の中のすべてのものを、主のために聖絶しなさい。ただし遊女ラハブと、その家に共にいる者たちは、すべて生かしておかなければならない。あの女は私たちの送った使者たちをかくまってくれたからだ。ただ、あなたがたは、聖絶のものに手を出すな。聖絶のものにしないため、聖絶のものを取って、イスラエルの宿営を聖絶のものにし、これにわざわいをもたらさないためである。」とあります。そして6:21「彼ら（イスラエル）は町にあるものは、男も女も、若い者も年寄りも、また牛、羊、ろばも、すべて剣の刃で聖絶した。」とあります。問題の出発点は聖書考古学における発掘の結果、ヨシュア侵攻の時期、この地は人の住まない廃墟であった、というのがほぼ定説となっている、ということです。いろいろ屁理屈がありますが、この物語を歴史的事実とすることは無理です。しかし、この時期の千年ほど前に町が襲われ廃墟になった可能性がある、ということです。これを総合して推測するに、イスラエルの民は、町の城壁が破壊され廃墟にされたという伝承のあるエリコの地に入り、ヤハウェ信仰の祭儀を行い、自らの基地となる町とした、ということではないか、という想像です。この町は、その地の神により呪われた地とされ人が寄り付かなかったのではないか、と思います。そう解釈すると、ここでの聖絶は、この地を聖別し、ヤハウェに捧げることを意味する、ということになります。異教の神の霊的働きを滅ぼすことです。

　エリコの次のヨシュアの占領した町はアイの町です。ヨシュア記8:26-28「ヨシュアは、アイの住民をことごとく聖絶するまで、投げ槍を差し伸べた手を引っ込めなかった。ただし、イスラエルは、その町の家畜と分捕り物を、主がヨシュアに命じたことばのとおり、自分たちの戦利品として取った。こうして、ヨシュアはアイを焼いて、永久に荒れ果てた丘とした。今日もそのままである。」とあります。アイの地でも、聖書考古学通説は、この時期、人が住んでいなかった、とするものですが、実はこの近くに小要塞が見つかり、此処がアイの町と言う可能性が浮上したのです。もしそうだとしても、この要塞が破壊されたのはヨシュの時代よりしばらく前の時期です。実は出エジプトの事件の前から、エジプトのイスラエル人はカナンの地に流入していたことが考えられ、彼らがアイの小要塞を滅ぼし、それがヨシュアのカナン占領の物語伝承に組み入れられた、ということが考えられます。しかし、その際の「聖絶」はせいぜい、小要塞の兵士全員ということであり、町の住民皆殺しのこととは考えられません。聖書におけるアイの話は宗教的雰囲気は感じさせない部分が多いのですが最後のところ8:31では「それは、主のしもべモーセがイスラエルの人々に命じたとおりであり、モーセの律法の書にしるされているとおりに、鉄の道具を当てない自然のままの石の祭壇であった。彼らはその上で、主に全焼のいけにえをささげ、和解のいけにえをささげた」とあり、全焼のいけにえ、和解のいけにえ、というイスラエル祭儀に結び付けられています。

このように見ていくと、この「聖絶」の言葉は皆殺し的なことが目的ではなく、異教の神の霊的働きを滅ぼし、主なる神に、敵より得たものすべてを聖別しこれを奉献し、ヤハウェ信仰の祭儀を行う、ということを意味している、と考えるのが妥当な理解であろう、と思われます。私は自分の言葉で「滅霊奉献」と言っています。「霊を滅し、奉献する」です。ここで言う「霊」は霊肉一つとなった「霊魂」のことです。肉体を含む「霊魂」のことをヘブル語では「nefe:sh」、ギリシャ語では「pshuke:」と言います。肉体を含まない「霊」には別の言葉があります。イスラエルの信仰で「霊」と言えば、「nefe:sh」「pshuke:」のことであって、霊が単独でふらふら漂うことはあり得ません。なんらかの「体」を持つのです。パウロの言う「霊の体」です。従って「滅霊」というのは霊魂を滅ぼす事であって、霊のみ単独で滅ぼすことはありません。しかし、霊魂において主人は霊ですから体だけ滅ぼす、というのは生きる命・霊魂を滅ぼしたことになりません。では霊を滅ぼすとはどういうことでしょうか。神とすることを止めることがその神の霊を滅ぼすということです。宗教的戦いは神々の争いですから、敵の神と民の関係を断ち切ることが戦いのい勝利です。これは即ち、改宗のことです。敵の民を、その神の霊から断ち切り、自分の神の祭儀に参加させることです。それが古代においては改宗の徴です。祭儀こそが信仰告白なのです。肉体的に滅ぼすこと自身は、あっても良いのですが「聖絶」そのものではありえません。しかし、異教の民の指導者は、改宗の象徴行為として死刑とするのは自然だと思われます。リーダーは神の僕だからです。

「奉献」の部分については次の通り理解できます。「聖絶」は「聖戦」と結びついています。聖なる戦争＝HolyWar=聖戦は「主の戦い」と聖書では言われています。「主の戦い」はもっとはっきり言えば「主が戦う」であり、イスラエルの民は主なる神のあとをついていくだけで、主なる神がイスラエルに勝利をもたらす戦争です。圧倒的に弱体なイスラエルの民が強大な敵に勝利する、という形で、全能の主なる神の力が示されます。具体的には、イスラエルの奇襲攻撃により、敵に何らかの理由で大混乱が発生し、少数のイスラエルが勝利を収めるとか、敵側の母国で大問題が起き、敵が撤退しなければならなくなり、そこをイスラエルが追撃し勝利を収めるとかです。自然災害がイスラエルの味方をすることもあります。一種の奇跡が発生するのです。それが主なる神が自ら戦うことの具体的意味です。「主の戦い」ですからその戦利品はすべて主の物となるのは当然です。途中でちょろまかしてイスラエルのものとすることは神の所有物を盗んだことになります。死に値します。アカンの罪の話はこの聖絶命令に反したことから発生したものです。この戦利品すべてを捧げるのが「聖絶」における「奉献」です。聖別し神に捧げることです。以上から、私は「聖絶」を「滅霊奉献」として理解しましょう、と言っている訳です。

もう一点「のろい」の訳について付言します。これも聖戦と関連しています。聖戦は、神と神の戦争ですが、この戦争に勝利すると言うことは敵の神とその民を切り離し、その神を無力化することを意味します。すると、その民は神なき民となり、神の守護のない、民となり一切の力を失うこととなります。この神の守護から見放され、神の一切の恵みから遠ざけけられた存在になることを意味します。これが「のろわれた」状態です。イスラエル信仰に於いて呪われた者とは神の恵みが一切及ばないところに追いやられた者、ということです。このことから聖絶に「のろい」の意味が付け加わっていったのです。新約での「anathema」「he:rem」はこの意味ですが旧約ではマラキ書4.06 「彼は、父の心を子に向けさせ、 子の心をその父に向けさせる。 それは、わたしが来て、 のろいでこの地を打ち滅ぼさないためだ。」の「のろい」だけです。聖書で「のろい」と訳される単語はヘブル語で３つありますが、そのうちの一つは日本語での「のろい」のニュアンスに近い、魔術的な「のろい」です。巫女さんなんかがやる、のろいです。あとの二つは基本的には神から切り離された状態を意味しています。「he:rem」もその一つで神との関係についてのみで使われます。

「聖絶」の解釈を「皆殺し」と理解したが故の悲劇がサムエル記にあります。それが本日の聖書個所としてあげた、サムエル記上15章の出来事です。概略を申し上げます。預言者であり最後の士師でもあったサムエルが、イスラエルの初代の王サウルにアマレク人と戦い彼らを完全に聖絶することを命じます。15:3「今、行って、アマレクを打ち、そのすべてのものを聖絶せよ。容赦してはならない。男も女も、子どもも乳飲み子も、牛も羊も、らくだもろばも殺せ。』」とあります。皆殺し的聖絶です。サウルは勝利しますが、15:8-9「アマレク人の王アガグを生けどりにし、その民を残らず剣の刃で聖絶した。/しかし、サウルと彼の民は、アガグと、それに、肥えた羊や牛の最も良いもの、子羊とすべての最も良いものを惜しみ、これらを聖絶するのを好まず、ただ、つまらない、値打ちのないものだけを聖絶した。」とあります。「その民を残らず剣の刃で聖絶した」のですが戦利品のうち良いものを「聖絶」＝「奉献」しなかった、と言われています。15:20を見ると、サウルがアマレク人にした「聖絶」とはアマレクの王を連れてきて、ヤハウェに従うことを誓約させたことのようです。サウルは王の誓約はアマレクの民全員の誓約と考えたのでしょう。これに対しサムエルの怒りが爆発します。主なる神の命令に違反した、というのです。サウルは民の声に引きずられてすべてを奉献することをしなかった罪を認めます。サムエルは「もうだめ、神はあなたを王から外した」と宣告します。そしてアマレク人の王アガクを「ずたずたに切った」と言われています。どうも、サムエルはアマレクの王を殺さなかったこと、戦利品の一部を奉献しなかったことが「聖絶命令」違反と断定したようです。15:3によれば、サムエルは、王以外のすべての民を殺すことも「聖絶命令」の一部と理解していたようです。サムエルは皆殺し的聖絶が主なる神の命令と理解したのです。それは、本当に主なる神の意思であったのかが問題です。「聖絶」の解釈として妥当な解釈であったのかです。イスラエルの王権をはく奪することに繋がるのですから実に重大です。

この個所についての聖書主義神学者の注解をみると、次のように書かれています。著者は福音主義の神学者として有名な榊原利夫先生です。まず「聖絶」についてですが、「聖絶は、現代人の道徳観にはショックを与えるが、戦争における非戦闘員を含む絶滅の惨事そのものは、むしろ第二次大戦やその後の局地戦でも決して解消していない」と言いつつ、“聖書での「聖絶」はカナン先住民に適用された限定的なことで、モアブ王の碑文やアッシリヤ王の手紙に見られる聖絶を誇るようなことから見れば、旧約の聖絶の制限的適用の方が意義深い”と言って、います。更に、“聖絶を敵国民族の極悪罪に対する聖なる刑罰という思想に結びつけることにより、蛮行を道徳的神学的に高めた”とまで言っています。私には全く信じられません。イスラエルの主なる神の「聖絶」の内容に「皆殺し」が不可欠な要素として入っているなど信じられるわけがありません。これは集団殺戮を正当化した屁理屈と言う他ありません。

次に遺棄の問題です。彼は、「聖絶には、初穂もいけにえも、あり得ないことを知っている者には、サウルの弁解は全く滑稽である」と言っています。「サウルが主の命令に忠実に従ったと良心的に確信しているだけにその滑稽さは肌寒いほどの恐ろしさになる」とまで言っています。こんな人に対しては、わたしは徹底的にサウロを弁護します。聖戦でもないのに戦争をやらされ、本来の聖絶でもないのに皆殺しをしろと言われ、妥協的なことをすると、神の言葉への違反として永遠の罪に定められ、榊原先生から嘲笑されるのは何たることでしょうか。このような神学はどこかおかしいに決まっています。主なる神の意思とは全く思えません。この思想は結局、力のある者が、常に神の意思に沿っている、ということを言っているに外なりません。この先生のおっしゃられる他のことには納得できることもあるのですが、この個所について言えば、かみついてやりたくさえなります。キリスト教に対する侮辱と敢えて言います。

このような考え方は改革派の二重予定説と関連しています。二重予定説は救いの道に入れられる者は神の計画の中で既に定められているのと同様、神に遺棄・見捨てられ永遠の罪に定められる者も既に定められている、というカルヴァンの思想です。全知全能の神である、ことの当然の結果であり、その定めは、人間に明らかにされていない、というに過ぎない、という訳です。遺棄された人物の代表はイスカリオテのユダであり、サウル王である、と言うのです。中世においてはユダヤ人全体が遺棄された人々として扱われました。そのまま受け取ると、あまりにもひどい、と思われる説であるため修正しようとする動きがあります。カンバーランド教会というのがあります。改革派の修正版の信仰告白を持っている教会ですが、彼らは「永遠の遺棄」はない、として遺棄された人間の救いの可能性を言っています。20世紀最大の改革派神学者と言われるカール・バルトも同様のことを言っています。この二重予定説の考えは人間の自由意志をどう考えるのか、ということと切り離せません。自由意志は罪の領域以外の何物でもない、ということで、自由意志が善き働きをなすことを全面否定する考えと、自由意志も神の創造物であり、本来「良き物」であるにもかかわらず、人間がそれを誤用している、と考えるかです。二重予定説からは前者の理解しか生まれないように私には思われます。私は、神は人間が自由意志により立ち返ることを望んでおり、その背後には神の忍耐がある、と理解していますので、どうも二重予定説にはなじめません。従って、遺棄という考え方を受け入れることができません。

サムエルのサウル断罪のところも、サウルは「聖絶」を近辺の他の民族と同様「皆殺し」のことと理解したと考えられますが、わたしにはそれが主なる神の意思であるとは思えません。「聖絶」の他の個所をよく見ていくと、皆殺し的聖絶が本当に実行された、と明確に言える個所は聖書には一か所もありません。全く現実の世界では起こらないことを主なる神が命ずるというのは歴史を支配する主なる神と矛盾します。人間の罪により、神の意志が歪曲されることはありうることですが、最終的には神の意志は貫徹するはずです。それが歴史を支配していることの証明です。「聖絶」は主の戦い＝聖戦と強く結びついた「滅霊奉献」のことで、改宗させ、ともにヤハウェ信仰の祭儀に参加させることだ、と理解するのが正しい、と思います。サムエルについてはその幼少の時の祈りの絵が思い出されあまり批判はしたくないのですが、このサウルに対する「聖絶命令」については神の言葉の解釈相違である、と私は思います。王権剥奪の理由づけに「聖絶命令」を使ったのは重大な問題と言わねばなりません。ユダヤ教の神学者で有名なマルティン・ブーバーもこの個所はサムエルの誤解である、と言っているそうです。

「聖戦」ということを厳密に「主の戦い」として考えてみると、本当に「聖戦」と言える戦争はカナン侵入の後、数回程度であり、あとは「聖戦」の名に値しない、とさえ言えます。主の言葉に基づき始まった、イスラエルの生存をかけたぎりぎりの戦争ということからこれは「聖戦」に値する戦争である、としても戦いが進むにつれ「聖戦」的正当性は失せ、単なる支配権争いとしての戦争に成り下がっているのがほとんどです。ダビデの、正式の王になってからの戦争には「聖戦」の定義に該当すると自信をもって言える戦争はありません。「聖絶」に関しては既に述べた通りです。「聖戦」と「聖絶」を大きなテーマとしているヨシュア記から列王記までの申命記史書はイスラエル王国の栄光を記したものではなく、イスラエルという国と民の罪の現実を赤裸々に記述した文書、と考えるのが妥当なようです。そこに示された罪の現実は単なるモーセ律法への違反ということにとどまるのではなく、人間の罪の深みとも言うべきものです。人間に刻印された原罪の現れ、とも言えます。これは人間の努力で拭い去ることが不可能な罪です。偶像を拝し、モーセ律法に従わなかったことへの神の罰としての異民族支配、という申命記史書に一貫して流れている考え方では、聖戦、聖絶に関し聖書が明らかにしていることとは合致しません。そこに示されている罪はイスラエルという民族的制約をはるかに超え、人類全体の罪を指示しているのです。その罪に立ち向かったのは旧約聖書ではイザヤ、エレミヤの預言者でした。もちろん、我らの主イエスはその預言者の伝統の先にある方です。祈ります。

（天の父なる御神様、今日の学びの時を感謝いたします。今日は所謂「聖絶」の理解をめぐっての聖書の記述を網羅的に見てみました。その結果、「聖絶」とは皆殺しのことではなく、異教の神の霊を滅ぼす、ことを指しているという私の理解を申し上げました。このことは申命記史書の解釈に決定的影響を与えます。またそれは、現在の中東戦争の中で、イスラエル国家をどう見るかにもつながっています。もしかしたら、私自身が全く誤解しており、とんでもない解釈をしている可能性もあります。どうか、聞く者、すべての人に主の霊が働き、正しい理解にたどり着くことができますよう導いてください。主イエス・キリストの御名により祈ります。アーメン）